

# 小学校における家族像

## —国語科と他教科の比較から—

大 沢 貴代美

### 1, はじめに

児童にとって学校生活と家庭生活は切り離しては考えられないものである。また、家庭の安定や協力なくして児童は落ち着いた学校生活を送ることはできない。そのため、小学校では各教科等の学習指導に限らず、生活指導や生徒指導などの中でも家族について取り上げる場面は多い。教科等の指導においても、家族の中での自分の役割について考えることや、家族を大切にすることなどが、学習指導要領における指導内容にもなっているため学年に応じた指導を行っている。ただ、家族や家庭生活の形は児童一人一人異なっており、多様化しているため、理想の家族像、もしくは一般的といわれる家族像を共通のものとして教師が強く掲げることは難しい状況がある。その中で、小学校における「家族」の指導、取り扱いについて、国語科、生活科、家庭科、道徳の指導内容や指導場面から考察する。

### 2, 国語科の視点から

#### (1) 国語科の目標と内容

国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。<sup>1</sup>

国語科は、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の3領域において、上の目標を達成するための指導が行われている。家族については、全ての領域において話題にできる可能性を含んでいる。特に低学年の児童は、身近なできごとを話題とした方が考えやすいため、多くの場面で家族が登場する。また、学習指導要領には、教材についての留意事項の一つとして、「**「オ」生活を明るくし、強く正しく生きる意志を育てるのに役立つこと**」<sup>2</sup>とあげられている。生活を明るくすることには家族の問題も含まれるため、教科書教材の中に家族に関わるものが掲載されていると考えられる。

#### (2) 家族に関わる小学校教科書における文学教材

国語科において、各領域で家族について取り上げられているが、「読むこと」の領域、特に文学教材に視点をあててみる。平成22年版の小学校国語教科書（教育出版、光村

図書、東京書籍）には、家族が関わる文学教材は以下のようなものが掲載されている。

※抽出基準

- ・主人公の家族が物語に登場する。
- ・家族とは、親子（子が大人の場合も含む）、祖父母と孫、兄弟、姉妹、子どものいない夫婦。
- ・物語には登場しないが、子どもの行動や話の流れに家庭や家族の姿が見えるものは含む。
- ・記述はあるが、登場しなかったり話の流れに関連がないものは除く。
- ・動物の家族を描いたものは除く。

（表内のゴシック体は戦時中のことが描かれた平和教材、アンダーラインは昔話や民話、落語などの伝統的言語文化に関わるもの）

	教育出版	光村図書	東京書籍
1年	<u>おおきなかぶ</u> （祖父、祖母、孫）	<u>おむすびころりん</u> （老夫婦） <u>おおきなかぶ</u> （祖父、祖母、孫） ずうっと、ずっと、だいすきだよ（父、母、兄、妹、子、犬）	<u>おおきなかぶ</u> （祖父、祖母、孫） サラダでげんき（母、子） <u>読書</u> はなさかじい（老夫婦）
2年	ひっこしてきたみさ（子） <u>かさこじぞう</u> （老夫婦）	わたしはおねえさん（母、姉、妹） <u>スーホの白い馬</u> （祖母、孫）	名前を見てちょうだい（子） <u>かさこじぞう</u> （老夫婦）
3年	<u>モチモチの木</u> （祖父、孫） おにたのぼうし（母、子） <u>読書</u> ソメコとオニ（父、母、兄、姉、子）	ちいちゃんのかげおくり（父、母、兄、妹） <u>三年とうげ</u> （老夫婦） <u>モチモチの木</u> （祖父、孫）	サーカスのライオン（母、姉、弟） <u>読書</u> 寿限無（父、母、子）
4年	一つの花（父、母、子） やい、とかげ（母、子） ごんぎつね（母、息子） <u>夕鶴</u> （若夫婦） <u>読書</u> 寿限無（父、母、子）	一つの花（父、母、子） ごんぎつね（母、息子） 三つのお願い（母、子） 初雪のふる日（祖母、孫）	走れ（母、姉弟） ごんぎつね（母、息子） 世界一美しいぼくの村（父、子、兄） <u>読書</u> 一つの花（父、母、子）
5年	五月になれば（父、母、子） 雪わたり（兄妹）	あめ玉（母、子） わらぐつの中の神様（祖母、祖父、母、子） <u>読書</u> 幽霊をさがす（母、子）	だいじょうぶ だいじょうぶ（祖父、孫） <u>読書</u> 岩田くんちのおばあちゃん
6年	川とノリオ（父、母、祖父、子） <u>読書</u> ブラッキーの話（父、母、子）	カレーライス（父、子） 海の命（父、子、母）	海のいのち（父、子、母） ヒロシマのうた（母、子） <u>読書</u> 桃花片（父、子）

小学校国語科の教科書に掲載されている家族に関わる文学教材を分析すると、以下の5点のような特徴がある。

①現代的で児童の実生活に近い家族が描かれた物語より、平和教育教材（ゴシック）や昔話、民話、落語等（アンダーライン）の方が多い。

「一つの花」、「川とノリオ」、「ちいちゃんのかげおくり」など、戦争によって家族が離ればなれになってしまう悲惨さ、それでもたくましく強く生きる子どもの姿が描かれている物語や、「おむすびころりん」、「モチモチの木」、「おおきなかぶ」など、日本や世界に昔から伝わる昔話や民話の中に登場する親子、祖父母と孫、夫婦、兄弟の関わりが描かれた物語の数は、現代的な家族を取り上げている物語の数の2倍近くある。児童が日常的に触れる機会の少ないものを教科書の中で取り扱おうしていることがわかる。また、伝統的な言語文化に関する事項が国語科の指導内容に入ったことも理由の一つと考えられる。

②戦争に関わる物語には、父母、祖父母、兄弟、姉妹と登場する家族の構成人数が多い。

物語中の登場人物として、「川とノリオ」、「モチモチの木」では、父、母、祖父、子、「ちいちゃんのかげおくり」では、父、母、兄、妹の家族が登場する。当時、親、子、孫の三世代が一緒に生活している家族が一般的で兄弟姉妹の人数も現在より多かった。戦争により離ればなれになってしまった家族も多かったという当時の日本の状況が物語の中に現れている。また、児童にとって身近な存在である家族が登場した方が、戦争の悲惨さを物語から読み取り、理解しやすい。

③現代的な家族が登場する物語は、家族の誰か誰かという個々の関わりが描かれている物語が多い。

「やいとかげ」（母、子）、「カレーライス」（父、子）、「だいじょうぶ だいじょうぶ」（祖父、孫）などでは、物語の中心的関わり合いの相手は一人であり、主人公の子どもが、家族の誰かと関わりながら成長していく展開が主である。関わりの少ないその他の家族構成員は、「やいとかげ」（記述なし）、「カレーライス」（両親が共働き母は帰りが遅い）、「だいじょうぶだいじょうぶ」（挿絵で父、母、兄弟が登場するが記述なし）、「走れ」（父は死別、弟）である。家族の構成員、中心となって登場する人も様々である。これは、現在の児童の生活環境と対応していると考えられる。実際に児童の家族構成も年々多様化している。

④全学年で家族に関する物語に触れられるような教科書構成になっている。

教科書に家族に関わる教材がこれだけ掲載されているということは、物語の内容や登場人物、出来事の種類の様々であっても、年間数回は学習教材として家族が登場する物語に触れる時間があるということである。児童が自分で選んだ本の中に家族に関わるものがなくても、学習教材として文学作品の中の家族について考えられる。文学教材を通じて様々な家族の形や家族に対する思いを知ることが教育的に意味があるということだ

ろう。

⑤現代の物語の出来事は、身近でありそうなのが挙げられている。

父の転勤、母の残業、祖父の病気、母の多忙、父の死、妹の落書き、祖父祖母の馴れ初め、友達とのけんかへの母のアドバイス、引っ越し、落とし物などをきっかけとして主人公は、ものを考え成長していく。児童の身近で起こりそうな出来事である。児童は自分が体験していないことも、文学教材をを通して読み取り、思いを巡らすことができる。

総合すると、国語科の教科書に掲載されている家族に関わる文学教材の中では、時代、家族の構成人数、家族内での出来事や約束事など、様々な家族の形が登場しており、児童が家族というものを幅広くとらえることができる構成になっている。現代の多様化した家族に対応して教材が採択されていることがわかる。

### （３）「五月になれば」 加藤多一（教育出版 ５年上）についての分析

筆者の所属校で使用している国語教科書（教育出版）では、現代の家族が登場する文学教材はそれほど多くなく、５年上「五月になれば」が、家族が描かれた文学教材として代表的なものである。そこで、「五月になれば」の内容を分析し、小学校の文学教材において家族がどのように取り扱われているのか具体的に示す。

○登場人物：大樹（小学５年生）、父（生まれ育った地で働くサラリーマン、転勤）、母（専業主婦）、卓男（大樹の友人、小学５年生）

○物語のあらすじ

主人公の大樹が、新学期になってすぐ、父の転勤による転校の話聞かされるところから物語は始まる。生まれ育った町を離れることを知って、小さな頃から父と一緒に釣りをしていたサクルー川での思い出やこれから楽しみにしていたことが次々と浮かんでくる。しかし、引っ越しをしないわけにはいかない。父母やサクルー川との関わりから、引っ越しを受け入れられるようになる大樹の成長が描かれている。

○父と子の関係を表わす表現

大樹の行動・言葉	父の行動・言葉
「ぼくだけ、ここに残りたいな。」	父が、大樹のかたを静かにおさえた。
「父さん、一緒に毛ばりでつる話、どうなるのさ。」 そんなのいやだ。	「いつか、休みの日に二人で釣りに来ような。」 「なあに、車で三時間だ。いつでも友達に会いに来られるさ。」

<p>そんな簡単にいかないことは、父も知っているはずだ。</p> <p>「今年こそもっと上流まで行ってみたいんだ。」</p> <p>「え、え、ほんとに、いいの？」</p> <p>大樹が先に川に入った。</p> <p>「助けて！父さん。」</p> <p>ぞっとした。声がかすれた。</p> <p>父に何か言おうとしたけれど、声にならなかった。</p>	<p>こんな時のためにとっておいた特別の声を出す。</p> <p>「休みの日に父さんと車で来ればいいさ。」</p> <p>しいんとした時間のあと、父が大きく息をした。</p> <p>「川との約束。守らないといけないな。」</p> <p>「川の主に引っぱりこまれるなよ、大樹。」</p> <p>「ようし。あわてるなよ。長靴なんか、くれてやれ。」</p> <p>大樹のうでがもげるほどの力で、ぐいっと引っぱり上げてくれた。</p> <p>「つりの仲間、川にとられたら、困るよ。」</p> <p>ふるえている大樹に向かって、父が笑った。</p>
--	---

○本文の表現から読み取れること

- ・父は大樹を小さな子どものように扱い、優しい声を出して、父の都合である引っ越しを受け入れさせようとしている。
- ・それに対し、大樹は絶対にいやだと強い拒絶。
- ・父と大樹の「毛針を使った釣り」の約束が、この引っ越し問題を解決するポイントになっている。
- ・川の様子や時刻、天候など全てがぴたり合わないと簡単に釣れないと言うことを知っている父だからこそその決断である。（釣りができるよう夏休み前まで大樹と母を残す）
- ・大樹が納得する解決をした。
- ・自分の思いをある程度通した大樹は、一年生の時の父との思い出を振り返り、父の思いを確認し、残り少ない日々を川とめいっぱい一緒にいようと思う。
- ・大樹にとって幼い頃の父は、自分を助けてくれた力強い存在である。
- ・五年生になった大樹は幼い頃とは違い、自分の意見が述べられるようになった。

大樹が離れたくないと強く思っているサクルー川は、父が生まれ育った地であることから、父にとっても多くの思い出がある川であることが分かる。父も子どもの頃から釣りを楽しんでいた場所であり、自分の子どもに釣りを教えた大切な場所なのである。大樹は、自分の思いを無理矢理通しただけでなく、父の気持ちを理解した上で、夏休みまでの間の過ごし方を考え気持ちを切り替える。ここに大樹の成長がある。また、父親は子どもの言うことをただそのまま聞いているのではなく、思いを受け止め、よりよい解決をしようと考えて結論を出している。引っ越しをきっかけとして、父と子の関係が互いの言い分を聞いて歩み寄る大人同士の関係に近づいていることがわかる。

## ○教材としての扱う視点

教科書の手引きでは、「中心人物の心情の変化を、場面の様子と共に読む」ことがねらいとなっている。心情の変化を読み取る視点を一つにする必要はないが、親子関係を中心とした主人公の心情の変化を読み取ることも一つの視点となる。

### (4) 国語科のまとめ

国語科において、特に家族についてこうあるべきだと取り上げることはないが、様々な形の家族が登場する文学教材が教科書に掲載されていたり、家庭のできごとを生活文に書いたり、スピーチの題材に家族を取り上げたり、家族について考える機会は多いことがわかる。児童にとって最も身近である家族は、小学校の教材として取り上げやすいものである。

## 3. 他教科の視点から

### (1) 生活科の視点(1、2年)

#### ①生活科の目標と内容

具体的な活動や体験を通して、自分と身近な人々、社会及び自然とのかかわりに関心を持ち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う。<sup>3</sup>

生活科の内容は、(1) 学校と生活 (2) 家庭と生活 (3) 地域と生活 (4) 公共物や公共施設の利用 (5) 季節の変化と生活 (6) 自然や物を使った遊び (7) 動植物の飼育・栽培 (8) 生活や出来事の交流 (9) 自分の成長、の9つが位置付けられており、そのうち家族に関わるものは、(2) 家庭と生活である。具体的な内容は、「家庭生活を支えている家族のことや自分でできることなどについて考える」、「自分の役割を積極的に果たすとともに、規則正しく健康に気を付けて生活することができる」である。

#### ②「家庭と生活」学習単元名

##### 1年

「みんないっしょに」

じぶんのいちにちをふりかえろう

いえのひとといっしょにしよう

じぶんのできることをしよう

ありがとうをとどけよう

##### 2年

「あしたへジャンプ」

大きくなった自分のことをまとめよう

ありがとうをとどけよう

〈出典〉新しい生活 上・下 東京書籍

生活科は、1、2年生が学習する教科であり、自己中心的思考をもつ成長段階にいる低学年の児童に、自分と家族との生活を振り返り、家族の一員としての自分の役割に気

づかせたり、家族への感謝の気持ちをもたせたりするために学習を進めている。家庭生活について目を向けさせ、自立への基礎とすることが生活科の目的である。国語の文学教材に登場する家族の扱いとの違いは、自分の家庭での生活や成長を直接見つめ、毎日のくらしへの意識を高めるという実際の生活と深く関わりを持っている点である。

## （２）家庭科の視点（５、６年）

### ①家庭科の目標と内容

衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して、日常生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けるとともに、家庭生活を大切にする心情をはぐくみ、家族の一員として生活をよりよくしようとする実践的な態度を育てる。<sup>4</sup>

家庭科の内容は、A家庭生活と家族、B日常の食事と調理の基礎、C快適な衣服と住まい、D身近な消費生活と環境の４つの分野に分かれており、そのうち家族に関わるのは、A家庭生活と家族の部分である。指導や題材構成の配慮事項として、「自分の成長を自覚することを通して、家庭生活と家族の大切さに気付くこと」「家庭には自分や家族の生活を支える仕事があることが分かり、自分の分担する仕事ができること」「生活時間の有効な使い方を工夫し、家族に協力すること」「家族との触れ合いや団らんを楽しむ工夫をすること」「近隣の人々とのかかわりを考え、自分の家庭生活を工夫すること」<sup>5</sup>が示されている。

### ②「家庭生活と家族」学習単元名

#### ５年

「家族とほっとタイム」

①楽しい団らん

②つながりを深めよう

・家族とのふれ合いや団らんに関心を持ち、楽しく工夫することができる。

#### ６年

「くふうしよう朝の生活」

①生活時間を見直そう

②共に過ごす時間をつくろう

③朝食を考えよう

・生活時間を見直し、朝の生活のしかたや、家族とのふれあいの時間をくふうすることができる。

「考えようこれからの生活」

①わたしたちの生活と環境

②感謝の気持ちを伝えよう

③人びとや環境とのかかわり

- ・ 近隣の人びととのかかわりについて考え、気持ちの伝え方が工夫できる。
- ・ 地域で快適に生活するための工夫について考え、実践しようとする態度を養う。

〈出典〉わたしたちの家庭科 小学校5、6年 開隆堂出版

家庭科は、高学年の学習であるため、生活に目を向け意識を高めることが目的である生活科より、さらに実践的な態度を育てることが重視される。家族を手伝うのではなく、家庭の中の自分の役割として働くこと、家族とのつながりを深めるために自分で考えて行動することなどを中心として学習を進める。国語の文学教材に登場する家族の扱いとの違いは、生活科と同様に児童の実際の家庭生活を直接見つめ直すことを目標としている点である。直接的に家庭生活をよりよくするための工夫や自分の考えを持てるようになることが求められている。

### (3) 道德の視点

#### ①道德教育の目標と内容

道德教育は、教育基本法及び学校教育法に定められた教育の根本精神に基づき、人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念を家庭、学校、その他社会における具体的な生活の中に生かし、豊かな心をもち、伝統と文化を尊重し、それらを育んできた我が国と郷土を愛し、個性豊かな文化の創造を図るとともに、公共の精神を尊び、民主的な社会及び国家の発展に努め、他国を尊重し、国際社会の平和と発展の保全に貢献し未来を拓く主体性のあるに本時を育成するため、その基盤としての道德性を養うことを目標とする。<sup>6</sup>

道德の内容項目は、1主として自分自身に関すること、2主として他の人とのかかわりに関すること、3主として自然や崇高なもののかかわりに関すること、4主として集団や社会とのかかわりに関すること、があり、その中で家族と関わりのあるものは、4主として集団や社会との関わりに関することである。具体的な指導事項は、1、2年では「父母、祖父母を敬愛し、進んで家の手伝いなどをして、家族の役に立つ喜びを知る。」<sup>7</sup> 3、4年では「父母、祖父母を敬愛し、家族みんなで協力し合って楽しい家庭をつくる。」<sup>8</sup> 5、6年では、「父母、祖父母を敬愛し、家族の幸せを求めて、進んで役に立つことをする。」<sup>9</sup>と示されている。



## ②家族愛についての資料

<b>1年</b> お父さんのカレーライス わたしたちの大切な日曜日 わたしも手つだうよ	<b>4年</b> 一まいの銀貨 お母さんの請求書
<b>2年</b> おふろプール サバンナの子ども	<b>5年</b> ○△□の中のわたし わが家の思い出
<b>3年</b> 母の日のプレゼント お兄ちゃんだよ	<b>6年</b> はじめてのアンカー

〈出典〉みんなのどうとく 埼玉県版（平成26年） 1～6年 学研図書みらい

道徳は全学年に渡って指導されるものであり、週1時間、道徳の時間が設定されている。道徳の時間に児童は資料に沿って人物の心情を考えながら、自分の気持ちを整理したり、友達と気持ちを共有し合ったりする。資料の形は決まっていなくてほぼ読み物資料が使われる。1時間で1つの資料を扱って話し合うため、国語の教材に比べると短く、主人公の心の動きが単純で分かりやすいものや指導する側が考えさせたいことが強く出ている資料が多い。出来事をとらえる資料として活用し、心情に迫りながら話し合いを進める授業を展開している。国語の文学教材に登場する家族の扱いとの違いは、資料に出てくる家族や主人公の問題や心情を直接話し合いの柱として取り上げる点である。高学年であれば、「父母、祖父母を敬愛し、家族の幸せを求めて、進んで役に立つことをする。」児童を育てるために、資料を活用して児童に考えさせるのである。

## 4. 考察

このように小学校では、様々な教科、領域において家族を取り扱った指導を行っている。教科ごとに違った目的があるが、児童にとってはどれもつながっており、それぞれの場面で学習したことと児童が自分の家族像に様々な視点から肉付けをしている。生活科で、自分にできるお手伝いを考えた時に、国語で学習した「サラダで元気」（1年生）のお母さんと主人公のやり取りを思い出す児童や、家庭科の家族の団らんを考える時に、「わらぐつの中の神様」（5年）の、祖母が孫に昔の話を語る場面を思い出す児童がいるかもしれない。道徳で家族愛について考える時に、文学教材の中の誰かの言葉と重ね合わせる場合もある。実生活の自分の家族について直接考えたり、生活の中で実践したりすることが求められる他の教科に比べて、国語科で家族と関わる文学教材を扱うことは、自分の家族とは違った関わり方を知ったり、家族に対しての考え方を広げたりすることにつながると考えられる。国語科の学習事項だけでなく物語内容も児童の心に響

くものとなっている。

## 5、おわりに

小学校においては以上のように様々な場面で家族に関する指導を行っている。理想の家族像はこれといった一つのものはないにしても、家族で協力すること、家族が気持ちよく生活することを学校生活全体を通して指導している。児童の家族構成や生活のしかた、家庭で家族と過ごす時間などが様々であり、プライバシーなど一人ひとりの児童に配慮した指導も求められる。

## 注

1. 小学校学習指導要領解説 国語編 平成20年8月31日 文部科学省
2. 小学校学習指導要領解説 国語編 平成20年8月31日 文部科学省 p.125
3. 小学校学習指導要領解説 生活編 平成20年8月31日 文部科学省
4. 小学校学習指導要領解説 家庭編 平成20年8月31日 文部科学省
5. 小学校学習指導要領解説 家庭編 平成20年8月31日 文部科学省 pp.17-23
6. 小学校学習指導要領解説 道徳編 平成20年8月31日 文部科学省
7. 同上書 p.46
8. 同上書 p.52
9. 同上書 p.61

## 引用・参考文献

- ・『新しい国語』 1～6年 平成22年3月16日（検定）東京書籍
- ・『新しい生活』 上・下 平成22年3月16日（検定）東京書籍
- ・『国語』 1～6年 平成22年3月16日（検定）光村図書
- ・『小学生の国語』 1～6年 平成22年3月16日（検定）三省堂
- ・『小学校学習指導要領解説 家庭編』 平成20年8月31日 文部科学省
- ・『小学校学習指導要領解説 国語編』 平成20年8月31日 文部科学省
- ・『小学校学習指導要領解説 生活編』 平成20年8月31日 文部科学省
- ・『小学校学習指導要領解説 道徳編』 平成20年8月31日 文部科学省
- ・『みんなのどうとく 埼玉県版』（平成26年） 1～6年 学研図書みらい
- ・『ひろがる言葉』 1～6年 平成22年3月16日（検定）教育出版
- ・『わたしたちの家庭科』 平成22年3月16日（検定）小学校5、6年 開隆堂出版

（おおさわ きよみ 埼玉県深谷市立幡羅小学校教諭）